フォトエッセイ＃１３２

函館ちょっと秋（その１）

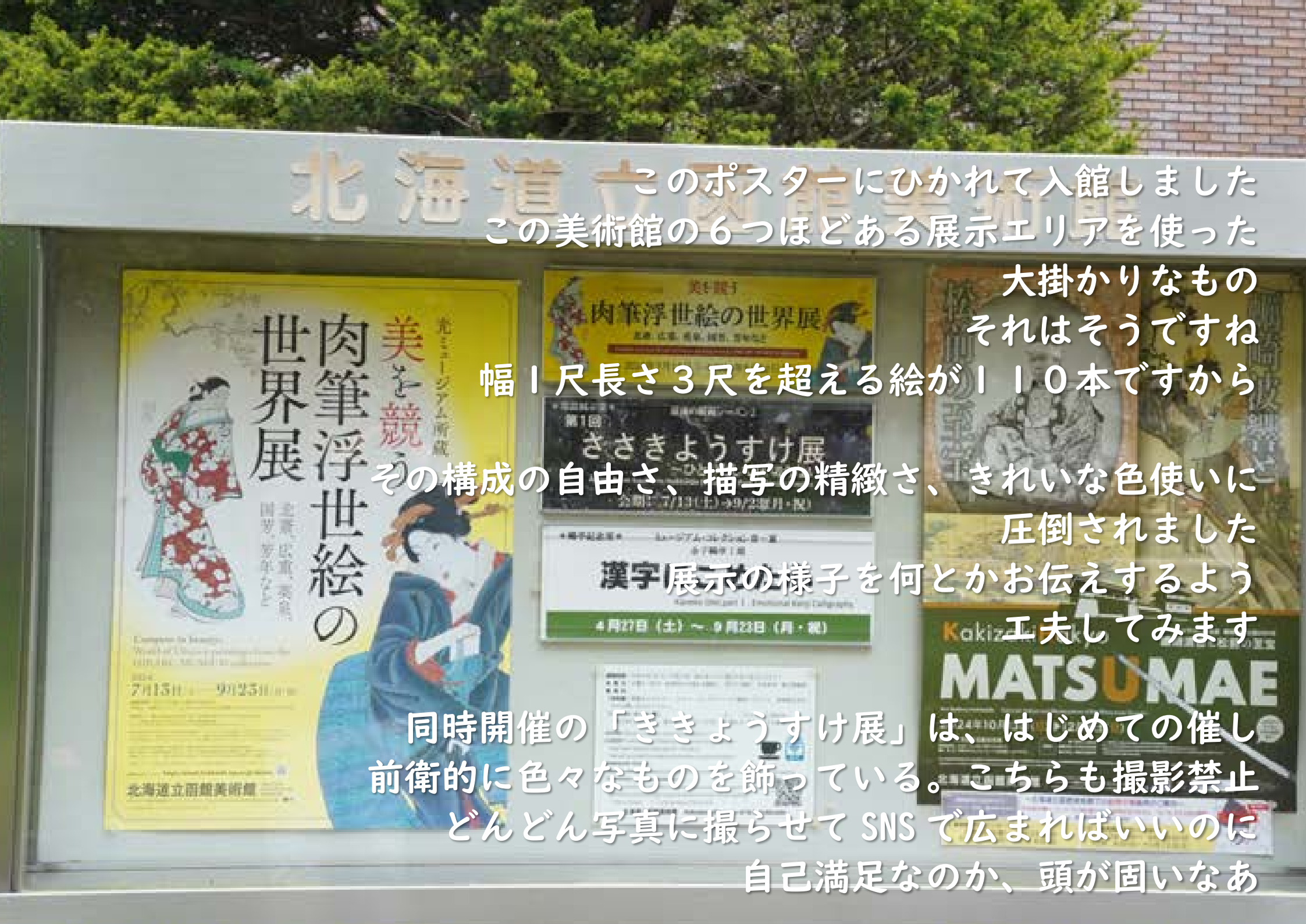
お堀の傍の美術館

五稜郭の正門近くに、道立の美術館があります
時々「大物」のテーマがあって
チェックが怠れません

今回は、岐阜県高山市にある「光ミュージアム」
所蔵の肉筆浮世絵１１０点からなる展覧会
ご多聞に漏れず、館内は撮影禁止
展示の雰囲気を直接お伝えすることができません

何故禁止なのでしょうね、不思議でなりません
著作権はとうに切れている・・・
海外の美術館は、フラッシュ禁止なだけなのに

2024.9.24
島田祥生



このポスターにひかれて入館しました
この美術館の６つほどある展示エリアを使った
大掛かりなもの
それはそうですね
幅１尺長さ３尺を超える絵が１１０本ですから
その構成の自由さ、描写の精緻さ、きれいな色使いに
圧倒されました
展示の様子を何とかお伝えするよう
工夫してみます
同時開催の「ささきょうすけ展」は、はじめての催し
前衛的に色々なものを飾っている。こちらも撮影禁止
どんどん写真に撮らせて SNS で広まればいいのに
自己満足なのか、頭が固いなあ

ミュージアムショップで入手した画集
今回は、これを「引用」して、会場の様子を紹介してみたいと思います

「本書の全部あるいは一部を無断で転載・複製することを禁じます」
とありますが
ネットで検索しても、連絡先が見つかりませんでした

これは、裏表紙に載っている
鳥園斎栄深の島君山《丸窓の三美人》部分
本物は、縦３尺３寸幅２寸
右から、小野小町、楊貴妃、吉原遊郭の遊女とか

江戸時代に生まれ、現在でも日本のみならず世界中で愛され続けている「浮世絵」。よく知られているのは、多色摺木版画で数多く制作された色鮮やかな「錦絵」ですが、「肉筆浮世絵」h、錦絵と異なり、浮世絵師が絹本や和紙に直接描いたものです。豪華な着物の文様や結髪の毛筋一本一本に至るまで、精緻な筆致で描かれており、柄師の技量が発揮された、直筆ならではの貴重な一点ものです。

本展では、光ミュージアム（岐阜県高山市）が所蔵する肉筆画コレクション４２０点の中から１１１点を厳選し、葛飾北斎、歌川広重、渓斎英泉、歌川国芳、月岡芳年など各時代を代表する絵師に加え、京都や大阪の上方などで活躍した多彩な絵師たちの作品を通して、江戸時代中期から明治時代にわたる肉筆浮世絵の歴史的展開をご紹介します。肉筆浮世絵ならではの精緻にして華麗な美しさを、この機会にぜひご堪能ください。（展示リスト冒頭の挨拶より。）

本展覧会は、コレクションの中から、時代を代表する絵師やその門下の作品１１１点を選び、浮世絵の歴史で版画作品を中心にその変遷に即して時代が分類されている。今回の展示は、以下３章で構成している。

第１章　肉筆浮世絵の展開

初期浮世絵の時代から始まる、多色摺り木版画の錦絵が誕生した錦絵創始き、そして今は世界的に知られている代表的な錦絵が活躍した遺言時代までの１３０年間に当たる。

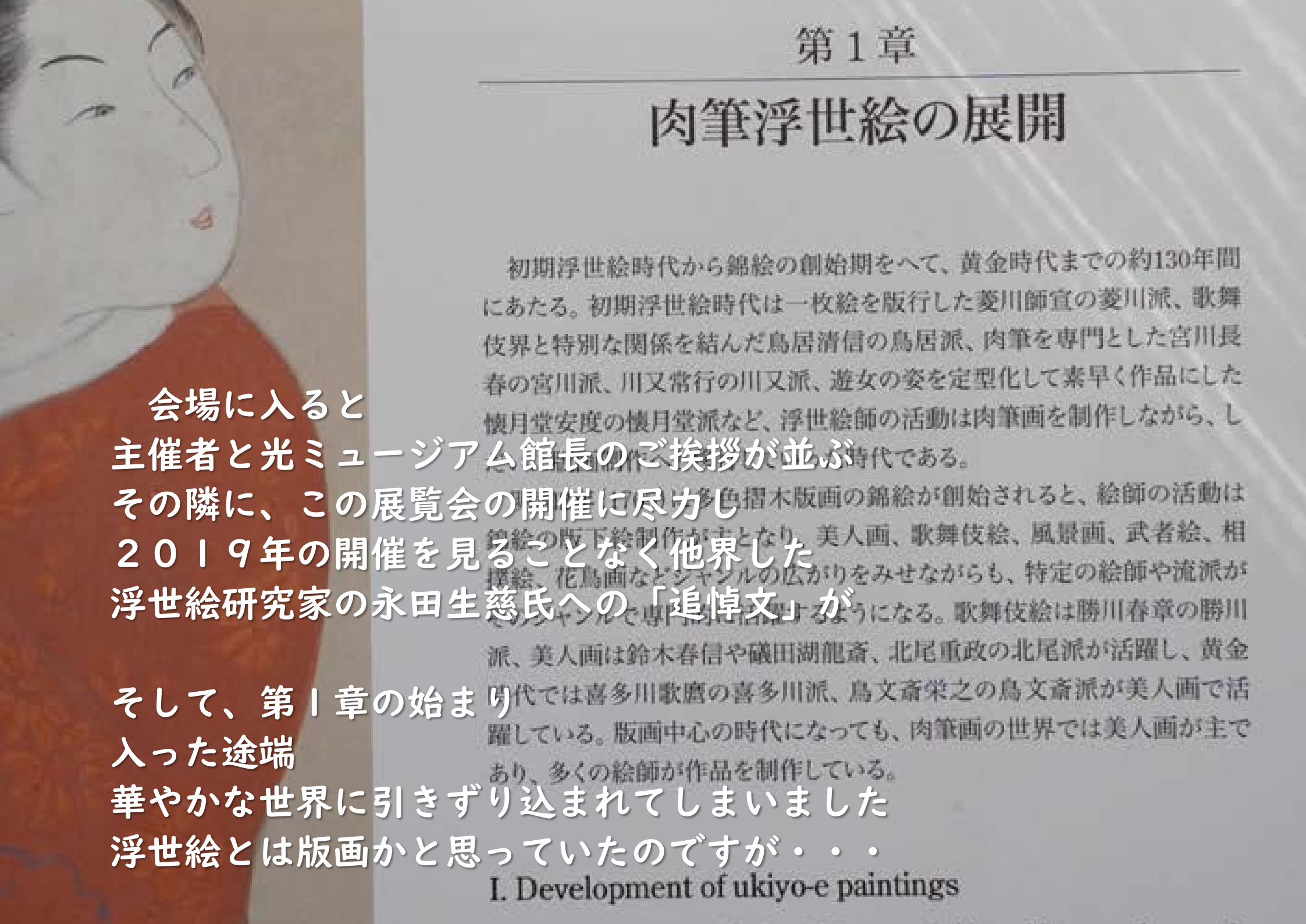
第２章　百花繚乱・多彩な作品群

文化・文政（１８０４~１８３０）以降の後期浮世絵の時代から幕末をへて、明治（１８６８^１９１２）までの約１１０年間に当たる。この時代最も活躍したのは葛飾派、菊川派、歌川派の絵師たちである。

第３章　上方と地方で描かれた肉筆浮世絵の展開

今日、大坂の地域を総称した上方では江戸時代に入って、寛文年間を中心に今日で多く制作された一人立像の肉筆美人画の作品群（寛文美人図と呼ばれている）をへて、初期浮世絵の時代に最も活躍した代表的な絵師が西川祐信である。

（画集、美を競う　肉筆浮世絵の世界より引用）



会場に入ると
主催者と光ミュージアム館長のご挨拶が並ぶ
その隣に、この展覧会の開催に尽力し
２０１９年の開催を見ることなく他界した
浮世絵研究家の永田生慈氏への「追悼文」が

そして、第１章の始まり
入った途端
華やかな世界に引きずり込まれてしまいました
浮世絵とは版画かと思っていたのですが・・・

西川照信の「奈良春日若宮社祭礼絵巻」
幅１尺あまり、長さ２間の大作
入って突き当たりの壁に存在感を発揮していました
描写の緻密さには驚きですが
これも肉筆浮世絵なのですね

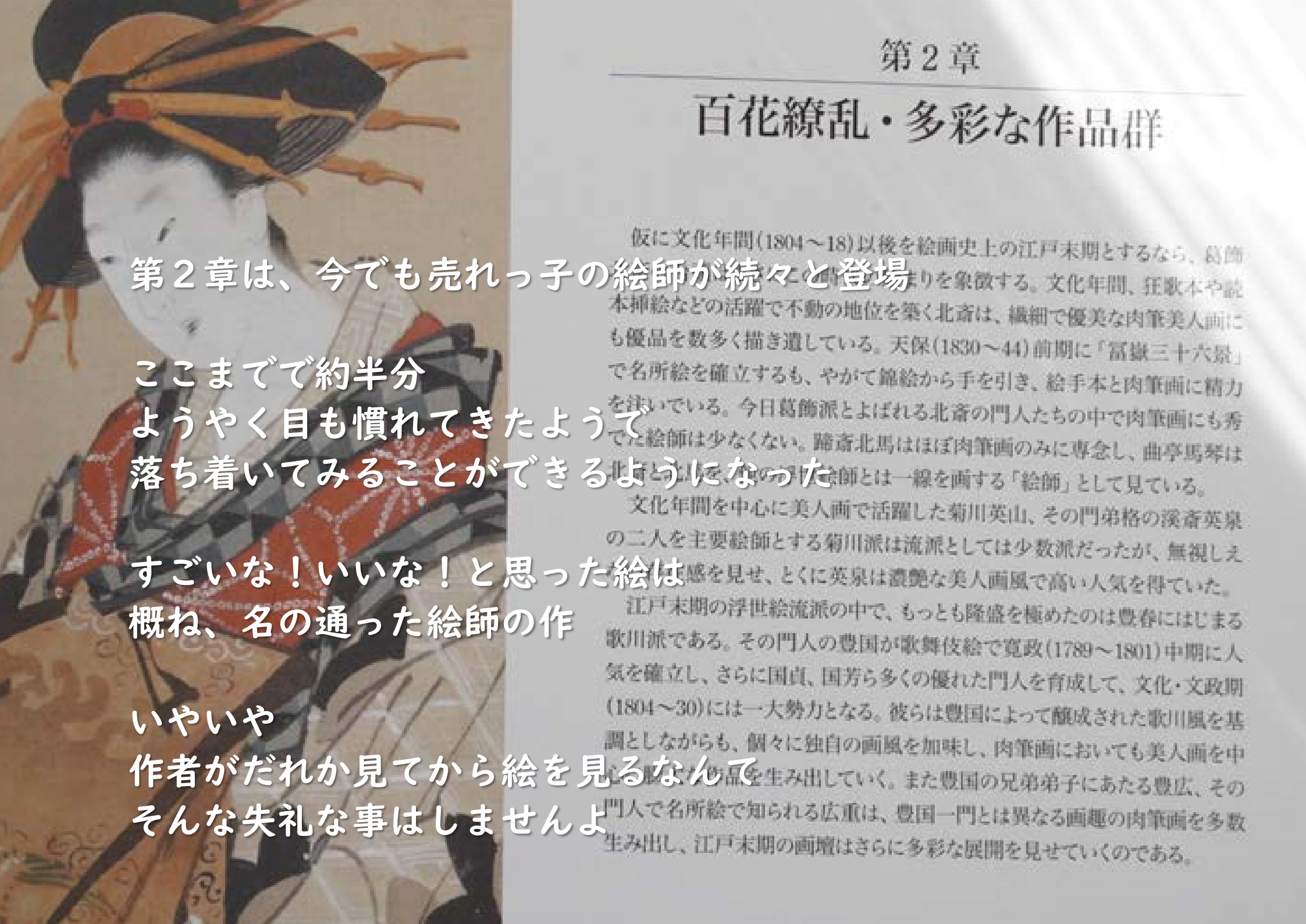
宮川長春の「見立琴高仙人」
幅１尺あまり、長さ２尺強、先ほどの絵巻の隣
鯉に遊女が乗っている荒唐無稽な・・・
ではなく、琴高仙人という中国戦国時代趙の人で
仙術を使う故事に基づいているとか
仙人を遊女に変えての遊び心
庶民がこれを楽しむほど当時の文化レベルが高かったのでしょう

27—勝川春栄（金太郎）
Katsukawa Shun'ei
Kintaro Shaking Down Tengu from Tree

29—勝川春栄（春風遊妓子行）
Katsukawa Shunei
Geisha and Her Attendant Walking in the Spring Breeze

勝川春栄の「金太郎」　長さ３尺幅１尺あまり
こちらも、荒唐無稽
金太郎が大木を揺らして
木の上にいた烏天狗がふるい落とされてる

金太郎は浮世絵の世界でも人気者だったようで
武者絵にもよく使われているとか



第２章

百花繚乱・多彩な作品群

仮に文化年間(1804～18)以後を絵画史上の江戸末期とするなら、葛飾
[illegible]りを象徴する。文化年間、狂歌本や読
本挿絵などの活躍で不動の地位を築く北斎は、繊細で優美な肉筆美人画に
も優品を数多く描き遺している。天保(1830～44)前期に「冨嶽三十六景」
で名所絵を確立するも、やがて錦絵から手を引き、絵手本と肉筆画に精力
を注いでいる。今日葛飾派とよばれる北斎の門人たちの中で肉筆画にも秀
で[illegible]絵師は少なくない。蹄斎北馬はほぼ肉筆画のみに専念し、曲亭馬琴は
[illegible]絵師とは一線を画する「絵師」として見ている。

文化年間を中心に美人画で活躍した菊川英山、その門弟格の溪斎英泉
の二人を主要絵師とする菊川派は流派としては少数派だったが、無視しえ
[illegible]感を見せ、とくに英泉は艶艶な美人画風で高い人気を得ていた。

江戸末期の浮世絵流派の中で、もっとも隆盛を極めたのは豊春にはじまる
歌川派である。その門人の豊国が歌舞伎絵で寛政(1789～1801)中期に人
気を確立し、さらに国貞、国芳ら多くの優れた門人を育成して、文化・文政期
(1804～30)には一大勢力となる。彼らは豊国によって醸成された歌川風を基
調としながらも、個々に独自の画風を加味し、肉筆画においても美人画を中
[illegible]品を生み出していく。また豊国の兄弟弟子にあたる豊広、その
門人で名所絵で知られる広重は、豊国一門とは異なる画趣の肉筆画を多数
生み出し、江戸末期の画壇はさらに多彩な展開を見せていくのである。

第２章は、今でも売れっ子の絵師が続々と登場

ここまでで約半分
ようやく目も慣れてきたようで
落ち着いてみることができるようになった

すごいな！いいな！と思った絵は
概ね、名の通った絵師の作

いやいや
作者がだれか見てから絵を見るなんて
そんな失礼な事はしませんよ

葛飾北斎の「日　龍　月」
幅４寸あまり、長さ３尺３寸が３幅
第２章の部屋に入った途端目に飛び込んできた

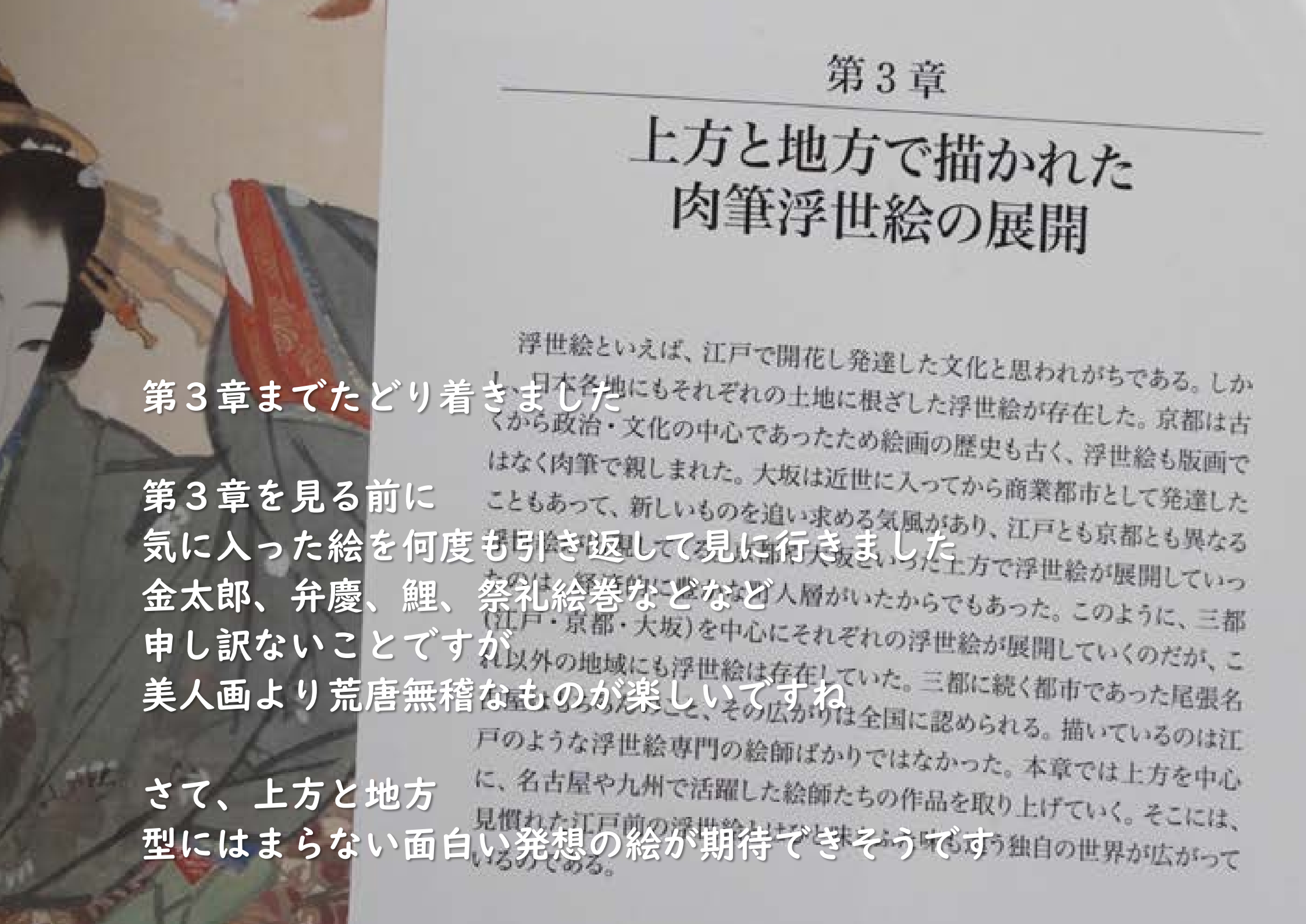
存在感ありあり
で、横の説明書きを見たら、葛飾北斎と

右の絵は誰の作だと思いますか
そんなの、分かるわけないですよね
でも、いい絵でしょ

歌川国重の「簾をあげる女」とありました
何となく庶民的で親しめる１幅
中秋の名月を見るためのしぐさとか
縁先には、秋の草花が

歌川国次の「三囲の三代目尾上菊五郎と芸妓」
幅１尺あまり、長さ３尺が２幅
２幅並んで、なんとなくひっそりとありました

彼らはこれから屋根船に乗って
河中で雪見の風流とでも洒落るのか、と
傍の解説にありました



第３章までたどり着きました

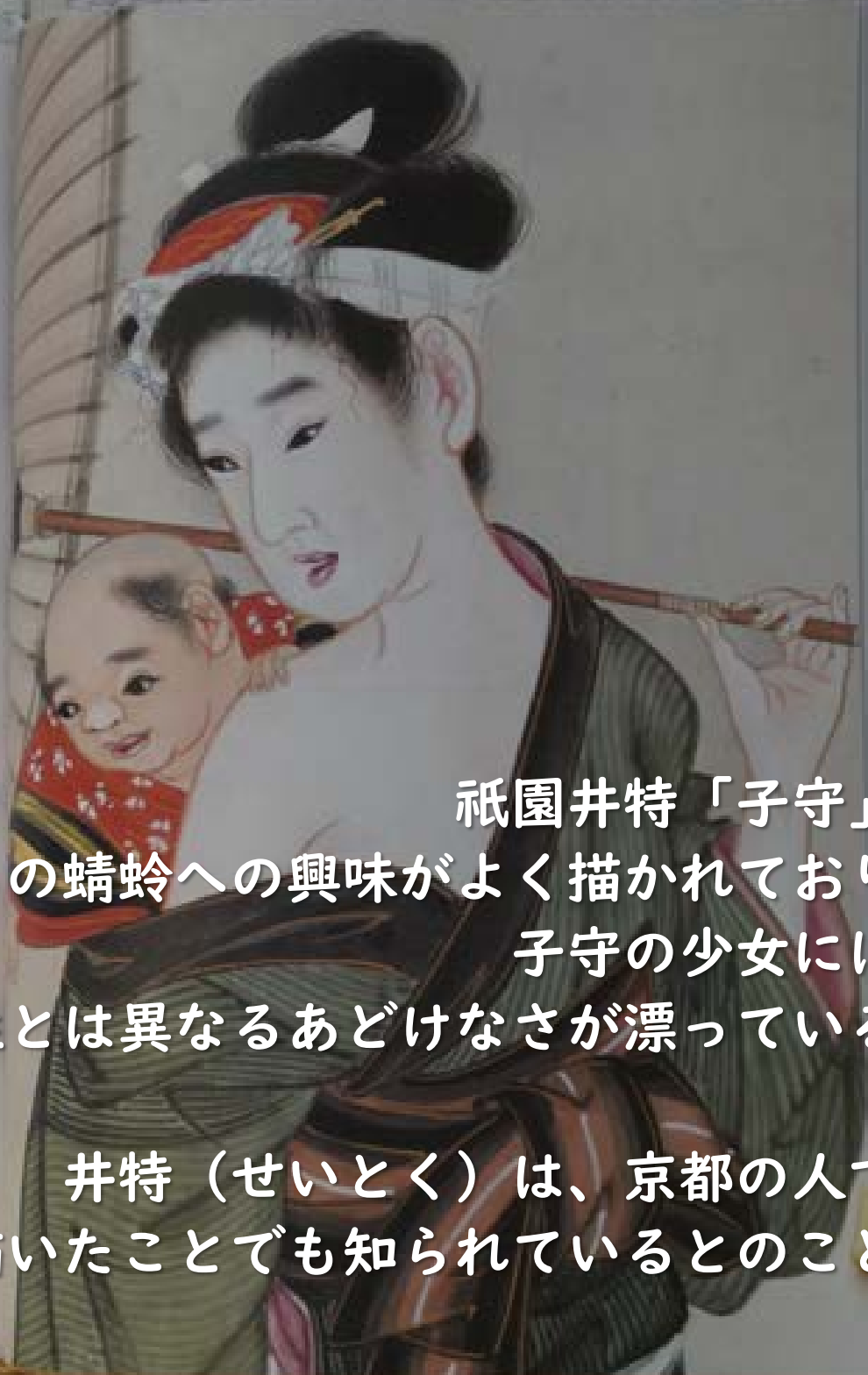
第３章を見る前に
気に入った絵を何度も引き返して見に行きました
金太郎、弁慶、鯉、祭礼絵巻などなど
申し訳ないことですが
美人画より荒唐無稽なものが楽しいですね

さて、上方と地方
型にはまらない面白い発想の絵が期待できそうです

「大原女」絵師は不詳
京都の働く女性たちの風俗が活き活きと描かれている

2——無款 《大原女》
Unknown Ohara Women

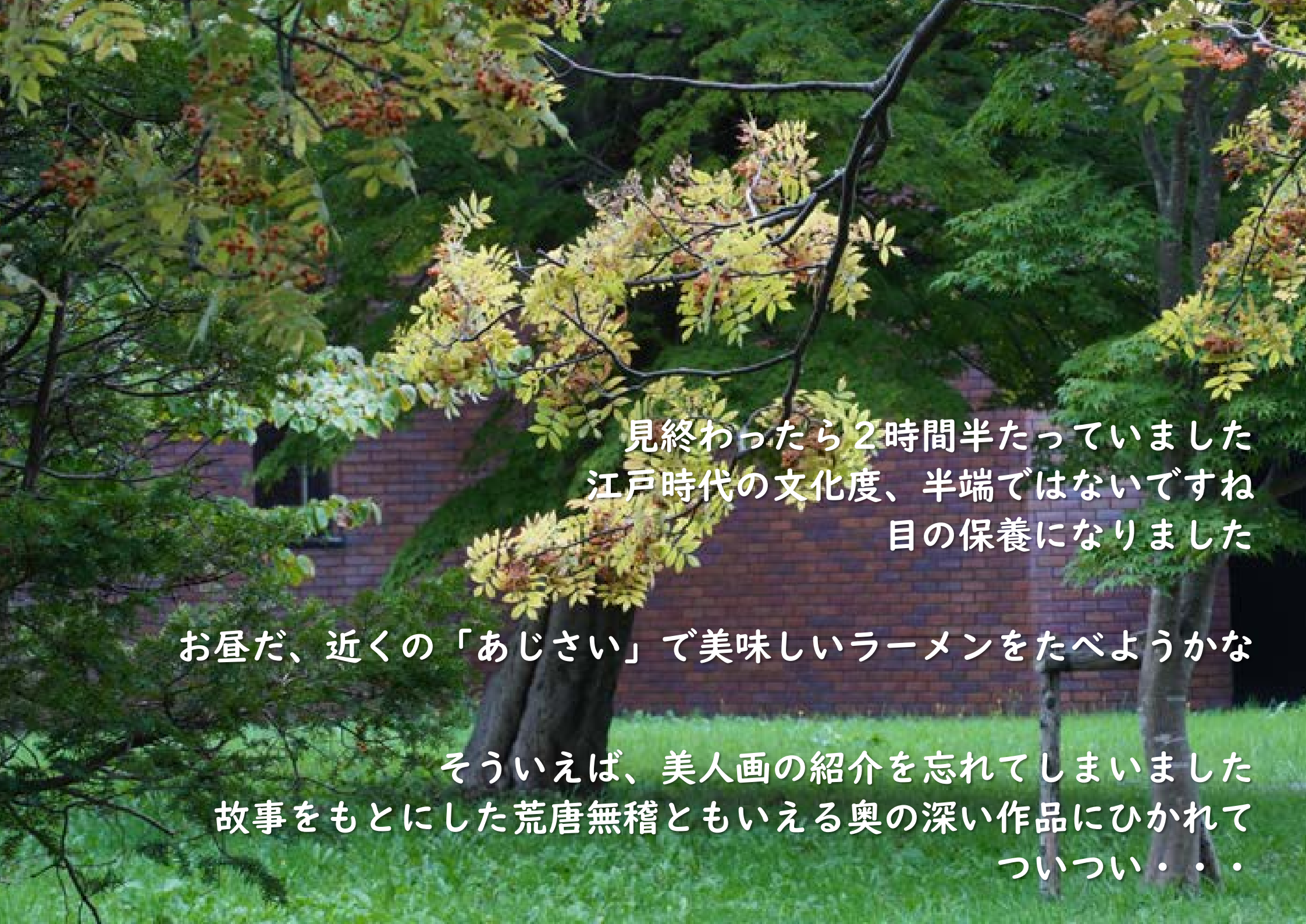
この章に入ると、今までの緊張感が一気にほどけた感じです
京都の庶民を描いたこの絵は、秀作と評価されていました



祇園井特「子守」
二人の子どもの蜻蛉への興味がよく描かれており
子守の少女には
花街の女性とは異なるあどけなさが漂っている

井特（せいとく）は、京都の人で
最晩年に「本居宣長像」を描いたことでも知られているとのこと

１１０幅目に近くなってきました
吉原真龍「潮干狩」
海のない京都からすると
大坂の住吉は最も身近な潮干狩の名所だったようです
画面から潮風を感じますね



見終わったら２時間半たっていました
江戸時代の文化度、半端ではないですね
目の保養になりました

お昼だ、近くの「あじさい」で美味しいラーメンをたべようかな

そういえば、美人画の紹介を忘れてしまいました
故事をもとにした荒唐無稽ともいえる奥の深い作品にひかれて
ついつい・・・